

ブロンテきょうだいの初期作品における「書くこと」と「描くこと」

侘美 真理

はじめに

ブロンテきょうだいの4人が幼少期から物語作りを始めたことはよく知られている。彼らの創作は1826年頃、シャーロット10歳、ブランウェル8歳、エミリ7歳、アン6歳のときに始まったとされる。ギヤスケルによって初めて世に知られることになった家庭内の創作活動は、T. J. Wise らによる初期の書誌研究、および80年代のChristine AlexanderとVictor Neufeldtが行った緻密な書誌研究と作品集刊行を経て、「初期作品」として整備された。結果としてブロンテ一家の文学活動は、作家として成功しなかったブランウェルの創作や詩作も含め、その全体が「ブロンテ文学」として高く評価されるに至った。同時に、彼らの幼い頃からの日常的な遊びが、後の本格的な小説や詩作品につながる修練の場であったと強調する傾向を生んだとも言えるだろう。Alexanderは「初期作品を通してきょうだいは様々なジャンルを実験し、そのことによって作家(writer)として成長できた」(Alexander and McMaster, 98)と述べ、膨大な数の物語は‘juvenilia’であると同時に「習作」でもあると主張する立場を貫いている。

『ジェイン・エア』やアン・ブロンテの『アグネス・グレイ』が「自己実現」を描く「教養小説」として読まれ続けていることもあり、確かに「ブロンテ姉妹」は幼少期から自立を求め、「書く」ことで自己実現を果たした作家であるというイメージがある。実際彼らの初期作品に「子ども作家」としての側面を見出すことは可能である。一方、彼らが物語を紡ぎだした「子ども時代」と言ってしかるべき最初の数年に絞って作品を読み直すと、「書く主体」としての自己意識を露わにする作品はそう多くないとも言える。むしろ若いシャーロットにとって「書く」行為は自己を分裂させる契機とも捉えられるのではないか。以下、シャーロットがRoe Head Schoolに通い始めるまでの10～14歳の数年間に焦点を当て、きょうだいの初期作品の始まりを紹介しつつ、検証する。

1. 始まり：兵隊人形を使った「劇」(plays)とGlass Townの形成

父親パトリックが持ち帰った12体の兵隊人形をきっかけに、きょうだい4人は各自好みの人形に名前を付け、これら‘the Twelves’や‘Young Men」と呼ばれる人形の冒険物語を作り始めた。初期には人形を使った人形劇を展開していたと考えられるが、程なく複数の劇や創作過程を紙片に書きとめ、物語を作ると同時に記録するようになる。またほぼ同時期に、兵隊の実寸に合わせた極小の「豆本」も制作され、ブランウェルがその世界を‘Young Menに本当に起きたこと」として扱った記述から、この架空世界が物理的・視覚的に構築されていたことが理解される。彼らは単なるままごとや遊びとしてではなく、人形たちが「生きる」かのような持続的な世界を成立させようとし、そのため劇の創作年代を細かく記録してもいる。こうした記録を重視する姿勢は、人形世界を単なる物語以上の「起源」や「創世」を持つ1つの「世界」として成立させようとしたことを窺わせるものである。

また、彼らは物語だけでなく空間の形成にも力を注いだ。兵隊たちの住む地としてアフリカ沿岸を舞台にGlass Townと名付け、きょうだいそれぞれの「分身」である各兵隊が保有する領土があると想定した。ブランウェルはGlass Town Federationの地図を作成し、さらには文芸雑誌の体裁を模した‘Branwell’s Blackwood’s Magazine」という名の「豆本」を作る。このように地図とともに、雑誌と読者(=Glass Townの住民)の相互関係を築きながら人形の「生きる」世界を実体化する。こうして作り上げられたGlass Townは超自然現象や子どもらしい空想に満ちた架空世界であるが、現実の政治家を模した人物も多数登場するなど、現実とファンタジーが混在する世界でもある。彼らの創作はやがて「アングリア記」と「ゴンダル記」という二つの物語群へと分化するが、長く続く創作活動の最初の基盤として、物語の創作以上に人形世界の物理的構築が試みられていたことは注目に値する。

2. 「大人の世界」の「模倣」

‘Branwell’s Blackwood’s Magazine’は現実のBlackwood’s Magazineを模倣している。表紙や目次を作り、活字体を模し、糸で綴じた冊子の形で月刊誌としていた。Alexanderは「オリジナルを作り直したり、それで実験したりすることを含めて、模倣(imitation)は文学的juveniliaの主要な特徴である」(Alexander and McMaster, 17)と述べ、子どもが現実の雑誌を模倣することは編集者や作家としての力を知り、大人の世界の権力を取り込む行為であると論じる。しかし、この過程は単なる大人の模倣に留まらず、子ども独自の声を孕むものでもある。というのも、Alexanderによれば、大人が表出させる子どもの声とは違って、子どもの書き手は自分が大人であるかのように書くと同時に、現実の子どもとしても語ることができるからである。Alexanderが例として挙げる‘Tales of the Islanders’において、確かに幼いシャーロットは、1829年のカトリック教徒解放令にまつわる議会の様子を再現して語り、大人と同じ政治的関心を露にする。一方、登場するDuke of Wellingtonは彼女の「分身」たるもともとは兵隊人形だが、途中で現実のウェリントン首相らの話題に脱線し、さらには現実のシャーロットの家族が登場し

て新聞を読み聞かせたりする。物語世界と現実世界が混在するような書きぶりは、シャーロットの政治的関心以上に、彼女の「書く主体」としての統一性が欠如していることを端的に示しているだろう。しかし、その統一性の欠如自体が、むしろ子ども特有の現実であるのかもしれない。子どもの書き手としての「主体」は構築されるや否や、次の瞬間に消失する。シャーロットの例は子どもとして語ることより、書くことを通じた主体形成がまだ確立していないことを示している。子どもが現実の雑誌を模倣する行為には、大人のモデルを借りて大人を演じたいという志向と、大人の世界への憧れや欲望があるが、その行為自体容易には成功しない。結果的に雑誌は2年足らずで廃刊とされることから、個人としての「主体」が確立することの困難さが読み取れるであろう。

3. 「主体」と「客体」の分裂、編集と統合

最初期の物語では、自分たちが構築した世界を守る「守り神たち (genii)」としてきょうだいたち自身が登場する。たとえばシャーロットは *Genius CB* として存在する。一方、彼らにはそれぞれの「分身」である兵隊もいてその人物の「声」も表現する。つまり彼らは創作者(creators)であると同時に登場人物(characters)でもあり、主体と客体が共存する空間を形成する。そしてこの「空間世界」に、継続性や様式といった秩序が必要とされる雑誌という媒体が導入されることで、ある事態がもたらされたと考えられるだろう。1つには「書く」行為の意味が顕在化し、彼らの「守り神」は次第にペンネームとしての機能を帯び、誰が書いたかを示す名前としての役割が強まった。さらにシャーロットとブランウェルは、それぞれが好む人物を選んで個別に物語を創作するようになり、この頃から実質的に「分身」であった兵隊たちは消え、守り神も消える。シャーロットとブランウェルのライバル関係がまたこの変化を促進し、その後急速に登場人物の数が増殖することから、個人としての主体は物語世界から「消失」もしくは「分散」したと言ってよいだろう。このようにきょうだいは初めから個々に主体性のある書き手であったのではなく、成長期の彼らが共同で世界を構築する過程の中で、むしろ「書く」行為は個別の主体性を分裂させる契機になったとも言えるだろう。

ブランウェルがシャーロットに雑誌の編集を一任して以降、シャーロットは作中人物が急増したこの「物語世界」を整備するかのように、作中人物の来歴や性格を整理して提示し、著者目録を作成するなどの編集作業を行う。物理的な「空間世界」の形成に始まった彼らの架空世界は、完全に紙面に移行することでかえって分裂と増殖の危機を迎えるが、シャーロットは編集作業によってその世界をまとめようとする。しかし、程なく雑誌という媒体の活用は放棄される。以来シャーロットは一般読者に向けた「物語世界」を創作し始めたと言えるだろう。

4. 模写：人間を描くこと

シャーロットの最初期の手稿には物語とともに水彩のスケッチが添えられていることから、絵は初期創作において重要な役割を果たしたと考えられている。実際、シャーロットは *Glass Town* の登場人物を描いたスケッチを数多く残している。しかし本格的に人物画として作中人物を描き始めるのは、彼女が *Glass Town* の雑誌を廃止した直後、*Roe Head School* でデッサンの基礎を学んだ時期からである。学校ではドローイングマニュアルから絵を模写する伝統的な教育を受けたとされる。シャーロットはこの時期にプロの画家として自立することを志向し、模写とドローイングの反復練習に専念していたとされる。このように模写によって人間を描くことは図らずも主体と客体の距離を詰める作業を迫られることになり、この行為はシャーロットの「物語世界」の創作において、それまでの「空間世界」の形成とは異なるアプローチをもたらした可能性がある。視点のコントロール、遠近感、安定した構図による立体表現といった手法が後の語りや人物描写に影響を与えた可能性も考えられるだろう。実際にその後のシャーロットの初期作品では、子どもらしい超自然現象の世界よりも、現実的な設定が好まれるようになる。このように子どもから大人に成長する過程において、「作家」になる（あるいは「画家」になる）という主体性は、シャーロットの場合、家庭内創作における「大人の世界」の「模倣」が失敗したこと、および絵を描く技術的な基礎訓練によってようやく芽生え始めたものであり、幼年期の物語創作という子どもの遊びから、技術・技法といった形式の体系に関心が移行することこそが、主体性形成の契機であると結論付けられる。

Alexander, Christine editor. *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë: Volume I The Glass Town Saga 1826-1832*. Basil Blackwell, 1987.

Alexander, Christine and Jane Sellars, editors. *The Art of the Brontës*. Cambridge UP, 1995.

Alexander, Christine and Juliet McMaster, editors. *The Child Writer from Austen to Woolf*. Cambridge UP, 2005.

Gates, Barbara T. 'Natural History.' *The Brontës in Context*, edited by Marianne Thormählen, Cambridge UP, 2014, pp. 250-60.

Wise, Thomas James and John Alexander Symington, editors. *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte Brontë and Patrick Branwell Brontë*. Shakespeare Head Press, 1936